

安すること能はざるあり。責むべき瑕瑾なき人の完全なる教訓が人の良心の上に勢力を有するは、毫も怪むに足らざるなり。今日此時に到るも、善人は皆ホピラトの斷案に同意し、悪人も亦た此斷案に錯誤あるを發見すること能はざるなり。我等進んで耶穌の最も内部ある品性を觀察せば、彼をして最も明瞭に最も正確に凡人と異あらしむる特質を發見せん。我等は耶穌の生活に固着せりといひ得べき瑕瑾を一つも發見する能はず、反て我等は耶穌に於て奇中の奇にして、到底人類の生活の範圍以外に在る事二つを發見するなり。其一は、耶穌に於ては自己の瑕瑾を關する何等の知覺も最微ある知覺も決して無りしと、其二は、耶穌が教説の躬行に於て、即ち其宗教に於て、毫も勉強したる痕跡無きこと是あり。夫れ此等の事は他の凡ての誠實なる人々、自己の何たるを知り且つ善

の何たるを知れる人々に於ては、決して見ざる所なり。最善の男女も己れの瑕瑾を感知す、其最も善なる者こそ最も明か己れの瑕瑾を知る人なれ。人若、我には瑕瑾なしと言は、我等は其誠實なるやを疑ひ、其本氣なるやを疑ひ、又は其言語の知識あるやを疑ひ、其善てふ觀念あるやを疑はん。而して我等の疑ひは尤もならん。凡る善に就きて高き標準を有し、且つ言語の意味を知れる本氣の人にして、唯耶穌にのみ適當あるべき此等の語を自から用ひし者は、未だ曾て一人も無ければなり。善の標準は眞個技藝家の標準の如し、技藝他に秀るに隨ふて益々己れの所作を以て満足せず、宗教に於ても亦た然り、最も聖に近き人は益々己れが基督に及ばざることを實に遙かなるを明知するなり。一人の不信者はいへらく、マリヤは耶穌の墓所に於て耶穌を貴んで以て理想化せり、是を以て耶穌教は生じ來れりと。此の不信者は此説を以て、此最も



驚歎すべき、千古に卓越したる事實を説明せしと自ら信ず。古來人心を感動したる最も高き標準には、唯耶穌獨り爲れるは何故ぞや。千九百の歲月を経るも耶穌の人物に増減する無きは抑も何に由るや。人類お於て言へば、宗教の躬行は自然性と戦かふなり。聖パウロは我等に然か教ふ。此戦ひはパウロが實歴せし所なり、最も聖なる人は最も明かに之を會得して、最も正直に之を告白す。パウロの記せし諸書は此宗教躬行の戦ひの事例にて満ちたり。耶穌自ら人に向て宗教的生活を勧めし時、セネカ 窄門に入るために力を盡せといへり。此力を盡せてふ語はギリシヤ語原文にて、痛苦と戦争との意を併有せり。然れども耶穌は己れの教説を躬行するよは、自ら勉力を須たざりし、耶穌の心の一たびも善に反對せざりし也。耶穌が自説を躬行せし品德、即ち彼が宗教は太陽の如く照せり、蓋し自ら光りに満ちたればあり、其心

底に於ては恰も源泉の湧出するが如く、故意を須たずして絶えず流れたり。勿論耶穌は戦ひしことありし、然れども是れ外部の悪と戦ひしなり、其内心に於ては悪と戦ひたること決して無かりしなり。耶穌がサタンに試みられしことは、余が茲に言ふ所と決して撞着せず。外部より來りし襲撃の力は、耶穌之感じたり、蓋し聖書に「かき自ら誘はれて艱難を受けたれば」と記しあればなり。我等此耶穌の試みられし物語を讀む時は、耶穌が試探に反抗せしは、啻よ正しかりしのみならず、耶穌に相應なる事なりしと感ずるあり。我等此事を誠に明かに會得するを以て、未だ曾て之を疑ひしことあらず、耶穌の心中には、其誘引されし惡に同情を表する者とは一つも無かりしなり。此等の事に關し、耶穌は自ら己れお就て何といふや。己れを何ありといふや。耶穌はピラトに告て曰く、我は眞理ありと、而して我等は耶穌の此



言を聞て感情を害せず。耶穌、或時、われ恒に我父の意を行ふといへり、而して我等は耶穌を信ず、即ち當に耶穌が自から天父の意を行ふと思ひたりと信ずるのみならず、彼れが實際に之を行ひたりと信ずるあり。耶穌其弟子に人類の惟一なる眞實の標準を與へんといへり、天に在す爾曹の父の完全が如く、爾曹も完全すべしと、然して耶穌の己れを以て人類の模範とせり、而して我等は耶穌は其自らいふ所の如き者なりと確信す、何となれば我等はこの人に於て罪あるを見ざれば也。耶穌は凡て此等の事をいひつゝも、誠實と質樸と謙遜の完全なる者を具へたりしを我等は認むるなり、唯凡人に過ぎざる者が我等に斯る事をいひたらんには、我等は彼れを輕侮せん、世の侮蔑は彼れを人の眼前より放逐せん。然れども耶穌斯る事をいへり、我等即ち其正しきを感じ、耶穌の言ふ所は眞實なり。耶穌は其自ら言ふ所の如き者なり。

右に均しく我等は耶穌が人の奉事と忠信と愛とに關して、言語ありてより以來未だ曾て言はれざる如き最も驚くべき要求を我等に向ての權あることを感ずるなり。耶穌曰く、若し我に従はんと欲ふ者は己れに克て、日々ろの十字架を負て我に従へと。又曰く、我よりも父母を愛む者は我に協はざる者ありと。凡ての事耶穌の意に譲らざる可らず。我等は耶穌のために土地、住家、父母、妻子、否ち一切をさへも棄てざる可らず。耶穌と其弟子等の忠實にして萬事を抛つ深愛との密接ある關係は、宇宙間の何物にも之を遮障せしむべからざるあり。我等は耶穌を我等の心中の第一位に置かざるべからず、何にても我等の愛と耶穌との間に障礙を爲さば、即ち我等が耶穌に對する忠義は無効とある者とす。凡人に過ぎざる者が耶穌の爲すが如き要求を爲さば、世人は之を輕蔑せん、而して此輕蔑は合理の事ならん。然れども耶穌は尙ほ此外己れに就て



証言せしことあり、即ち唯人間に過ぎざる誠實本氣の者が須臾も思ひ能はざることを自ら己れに就ていへり。耶穌は自ら人の罪を赦すの權ありといへり。若し耶穌を以て唯人間に過ぎざる者とせば、耶穌を評せし人々の思ひし所は道理あり。彼等思らく、斯人は何故かく惡口を言ふか、神にあらすして誰か罪を赦すことを得ん」と。

耶穌は他の預言者等が未だ曾て自ら言ひざりしことを自ら言へり、即ち自ら永生の父を代表するのとならず、神を知り悉せりといへり、是れ人類も過ぎざる者が自ら言ふ能はざる所なり。耶穌曰く、父は我に萬物を予へたまへり、父の外に子を識者無く、また子及び子の顯はす所の者の外に父を識者亦しと。其死する前夜に於て弟子等に告げて曰く、なんぢら心に憂ること勿れ、神を信じ、亦われを信すべし」と。

耶穌は屢種々の語を用ひて、自ら其由來する所と品性も於て人類以上

の者たり、自然の理法に超越せる者なりといへり。耶穌曰く、我と父とは「あり」と。耶穌の自ら神性を具へたり、即ち神なりといふなり。若し耶穌として凡人に過ぎざる者なりとせば、斯る自証は其本氣なること、若くは其誠實なることに合はざるなり。アウガスティンはどの論旨を其極度まで分析して、竟に左の大斷言を著して曰く、クリスマスマン、デウス、ノン、ポヌス」と、之を譯すれば、基督若し果して神に非ずば、則ち善人に非ずとあり、立言誠に正しといふべし。

### 第拾六章

#### 耶穌は宇内を包括する唯一の人物あり。

現今の世界に於ける耶穌、即ち單に福音記者が傳へたる物語や其他の諸書中に於る耶穌に非ずして、人の生活中に存在する耶穌を考察する



に於て、前に陳べたる所の外、尙や我等が下すべき見解あり。我等の唯見解を下すべし止る、蓋し其指示する凡ての事を悉く會得するは我等が力の及ぶ所に非ざるはなり。

前に耶穌の如き人物は決えて捏造し得べからざる者たること、及び斯の如き特質ある人物はヒブライ生活の自然の發生物に非ざることを我等が信せざるを得ざる理由を論せし時少しく講究せしことを、今茲に一層注意して講究せざるを得ず、即ち耶穌は宇内を包括する人物なること、——千古の歴史中、記事、中、人の思想中、現はれたる人物の中未だ會て比類あらざる唯一無二にして、宇内を包括する人物あると是れなり。夫れ人類中には大なる差別あり。或人々は心狭くして、彼等が生れ、生活し、而して死せば全く痕跡を止めざる小區域の外、他に其思想同情を及ぼすこと殆んど無きなり。其生活全く一地方に限りて、其區域以外

の人情を會得すること能はず、また其區域以外の人も彼等の心情を會得すること能はざる所の人々も世には之れあり。地方に限れる一土音毎、其裏面には其地方に限れる思想と、生活の在る有り。我等が一人、一國、一州に就て、地方氣質かたぎてふ語を用るは何の意味ぞや。制限の意味なり。孰れの處にも此例証あり。スコットランド高地々方の人、他國人の往復稀れなるアイルランド農作地方の人、また米國にていは、生來他國れ地を踐まざるニューイングランド人、さては昔氣質むかしかたぎ一轍の南部地方人あるデヨルデヤ州村落の者を見よ。此等は地方氣質の人々あり。彼等は稱美すべき、また實に雄偉ある性情を有するならん。然れども彼等の見る所は小く、其同情を表する區域狭くして、夫れ丈け他の境遇に生活する同儕の同情を得る能はざるなり。野蠻の民は地方氣質かたぎの極點を顯すあり。



然れども我等先人類の最上流に立てる者等より例を擧げん。往古の人にしては先づ心の廣きこと他に譲らざるプラトを見よ。彼れ何者ぞ。徹頭徹尾ギリシヤ人なり。凡て羅馬人にしてデユリウス、シーザルより偉ある人物無し。然れどもシーザルは其本質に於て實に羅馬人に過ぎず。彼れの人と爲りは其人種と國土に制限され、其性質中には、羅馬人ならでは會得する能はざる者許多ありし、是を以て其他國の人情に關する知識を狭からしめし者許多ありしなり、尙ほ近世に下りていはゞ、數年以前基督新教社會はマルチン、ルーテルの第四百年誕辰を祝せり。死後百世に涉りて感化力を及すべき性質は充分ルーテルに具はれり。ルーテルが改革の結果を享有する各國に於て、此日耳曼國大改革者の誕辰を祝せしは、實情の發瀉する所ありしあり。各國人はルーテルに對して同情を表し且つ多少彼色の人と爲りを

會得せり。實にルーテルの生活に日耳曼國の境域を越えて、他の諸國をも益すべき勢力あり、然れども到底日耳曼人たるを免れず、故に宇内を包括せる人物に非ずして、制限ある人物なり。是を以て日耳曼人がルーテルを見るは、英吉利斯、佛蘭西、亞米利加等の國人が見るよりも、一層感覺の深き者あり。是れ單に日耳曼人は自國の豪傑を誇るの愛國心よりして、感覺する所他國人よりも一層深きのみならず、彼等は他國人よりも一層よくルーテルの人と爲りを會得するを以てなり。縱ひルーテル再び世に出るとも、其他國の人情を會得すること、日耳曼人の情を會得するが如くは深からざるべきなり。宗教社會以外に於ては亞米利加のワシントンを見よ。彼れ豪傑にして、凡そ眞實心を有する人が皆な見て以て稱讚する所の性質を具ふといへども、其本質は純然たるヅヅルヂニヤ州人、而かも其當時の殖民地貴族的のヅヅルヂニヤ州人



たるに外ならざる也。

現今の人よては、英國のグラッドストーンを見よ。見識廣く、世態に通じ、智慧圓熟、博學多能にして、其が心の大さると同情の廣きとに於ては、實に現今の何人にも譲らずといふて可なる者なり。然れども彼れは到底英國人なり、彼れの性情中には他國人の會得し能はざる者許多あり、而して他國人の誰れの性情中もグラッドストーンが充分會得し能はざる者許多あるなり。尙ほ一例を擧げんに、夫の詩人の君、戯曲家の王にして、我等が「千心萬腔」と稱するウヰリアム、シェキスピアを見よ。想ふにシェキスピアが自ら身を他國人の境遇に置き、其心情と同一なる心情を感識するの能を有せしは、古來の文人中孰れにも劣る所無かりしならん。實にシェキスピアは、人力の及ぶ限りに於て、所謂人類全體の詩人たるに最も近き者なり。然れども其著せし大戯曲は他國語に

翻譯し能はずとは、是れ文學社會の常話にして、恰もブラッセル國に最も美味なる一種の蜜柑成熟すれども、遊歴者の談話に據るに、他國に輸出して味の變せざる者一つも無しといへるが如きあり。若し是れ唯言語上の困難に由るのみといはゞ、即ち是れ人類に過ぎざる者が免れ得ざる制限を意味するなり。然れども斯くいへばとて、翻譯の困難を説き盡せりとはいふ可らず。此困難は人類の特質たる有限性に在るなり。英國人たりしシェキスピアの著書を正しく充分に會得し能ふ他國人は一人も無きなり。

或る著述家のシェキスピアを論じて、シェキスピアは第十六世紀の英國人を戯曲に描出せりといへり。シェキスピアは他國人も描出したれど、是れは唯他國人の事を記せしに止る、彼れが眞乎たる戯曲中の人物と成したるは唯英國人のみあり。第十六世紀の人を戯曲的の



人物とは成さざりし。其著書中の人物にして各國に適合する者、即ち人類の代表たるに足るべき者は有ると無し。況んや第十九世紀の人物をや、唯文才のみにては斯る先見を得るに由なき也。蓋し人類の思想、同情、品性等は、當り土地によりて制限さるゝの事ならず、其時代もよりては（土地も由てよりも）更に幾層制限さるゝ也、即是彼等の在世以前より傳はりて、彼等の在世中は、彼等を圍閉する諸勢力によりて制限さるゝ也。然るに時代、土地、血統、國柄、教育、言語等に關して、我等ナザレの耶穌を觀察する時は、抑も如何なることを見るや。一事の著しきあり、即ちナザレの耶穌てふ語を用ふといへども、我等耶穌に對する時は、其のナザレたるを毫も思ふること、是れあり。我等は耶穌をユダヤ人なりとも思はず、否、亦亞細亞人なりとすら思はざるなり。其ガリラヤ人ユダヤ人、亞細亞人たることは、其人物中に消滅し去れり。耶穌の諸境遇の勢力は一

つも其人と爲りに痕跡を留めず、或は土地の氣質に染らしめ、または其同情を界限し、若くは其人たるの圓滿、融和、完全ある天性に一微瑕をだも與へたる勢力の痕跡更らに無し。若し翻譯者にして言語に精通せば、耶穌の語は他國語に翻譯するを得ること、唯人間に過ぎざる者等の言語の比に非ず。翻譯よりて耶穌の思想が其趣味、狀勢、其他何事にても失ふべしとは、余の信せざる所なり。翻譯さへ正當ならば、耶穌の思想は今日の亞米利加人に對するも、猶ほ其在世當時に於て其言を最初に聽きし人々に對せし時と同一なる意味を有せんとす。人種を異にし言語を異にする人々に對しても、彼等の心中に同一ある思想を惹起し、同一ある確信を有せしめ、差別なき同情を發せしむ、而して如何ある國語に翻譯さるゝとも、善惡邪正の辨別、及び人の義務に關しては同一なる結論に導くのみ。耶穌の言を遵行せば、



國の開明野蠻に拘はらず、各國の人の中に、其要素に於て同一ある品性を生ずるあり。是れハ人種亦も倚らず、遺傳性にも倚らず、また境遇にも倚らず、福音を受けて之を躬行する人の品性上の結果は、孰れの時に於ても、孰れの處に於ても、常に同一なり。基督教の興りし當初に於けるギリシヤ人にもせよ、羅馬人にもせよ、スクテヤ人にもせよ、ヒブライ人にもせよ、または現今に於けるカウカス人にもせよ、アシヤ人にもせよ、アフリカ人にもせよ、凡そ基督に従ふ人は基督の形像と爲さるゝなり。如何ある地味も、如何ある氣候も、また如何ある時節も、此木に成る果實を變ずるふと無きなり。

耶穌の言の我等に對する意味は、猶ほ其最初の弟子等に對せし意味と同じ、加之、其我等を感せしむる程度に於ても、また最初の弟子等を感せしめしむ同じ、是れ就中耶穌が唯人間に過ぎざる者に異ある所以なり。

耶穌が現今の罪ありて悔い改めたる女に於けるは、恰も夫の高慢なるパリサイ人の家にて耶穌の足に接吻せしマリアに於けりしを如し。惡に溺れたる醜陋の女、又ハ窮苦に惱める人が耶穌を要するを感じて、其哀憐を求むる時、耶穌の之に對する、猶往時風癲病に惱める人、または夫のガマラ人に對せしに均す。今日死者を哀悼すること、マリヤ及びマルタの如き人あらば、耶穌の是等の人に於けるや、猶ほベタニヤの姉妹に於けりしが如し。凡て此等の事は耶穌自から己れを稱して人の子といひしよ合へり、耶穌の外、孰れの人か自身に就き、人類に就き、また自身と人類との關係に就て斯る觀念を懷きしぞ。耶穌の一言一行も其時代及び人種に界限せられず。耶穌は實に人の子なり、即ち宇内を包括せる無上の人物にして、人類全体を代表し、且つ此世に於ける男女老幼各自の兄にして、凡てを愛し、また凡ての人が宜しく崇敬して愛すべき人物



あり。

第十七章

「基督、即ち活ける神の子」

耶穌の教訓は人の良心を鼓動して、之を活潑ならしめ明かならしむる能力を有すること、耶穌の品性と生活は其自ら宣べたる教説に形体を與へ、之を解釋し、其意味を明かにして勢力を與ること、耶穌は宇内を全然包括する人物にして人類各自の兄弟たる故に其愛に偏頗なきと、是等の諸事に就て前も陳べたる所は自然に我等をして尙ほ一事を簡短に陳べざるを得ざらしむ、此事は我等が日常に觀察經驗する所の最も尋常なる事なれども、而かも耶穌の品性特質と分離すべからざる者なり、即ち耶穌自身と其教説が人類に及ぼす結果是れなり。

余が陳べんと欲せる所は、凡そ基督教徒と稱せらるる者ハ悉く此等の結果を顯はすといふに非ず、また凡そ基督教徒たる者は皆な此等の結果を顯すといふにも非ず、また古來曾て基督教徒と稱せられし孰れの男にても女にても耶穌の教訓を充分に受けて之を躬行するの自然結果として人類が顯はし得べき凡ての結果を悉く顯はせりと云ふにも非ざるあり。余は斯の如きことを主張するよりも寧ろ贋造貨幣を辯護せん、また凡て純金を含める貨幣ハ其量目も法お合ひ、且つ下等金屬も混合しあらずと主張せんのみ、然れども余は敢て言ふ、耶穌の教訓を受け容れて之を守る人々に於て、我等ハ耶穌が其教訓を守るに従ふて來るべしと指示せし結果の顯はるるを必らず見る、而して此結果ハ遵守の厚薄に隨ふて差等ある者にして、最も善く之を守る者は、夫の完全無缺ある唯一の人物に最も善く肖たる者とあるなりと。



我等は茲に神學上の議論を少しも爲さるべし、又我等は本題に關する哲論にも觸じ、然れども我等は一の條件も附せずして十分に左の一事を斷言するを得べし、曰く、耶穌の言を信受して之を守る者は、啻に其生活の模様の一變するのとならず、我等が付度的手段を有する限りに於て之を揣るに、其生活の精神もまた一變するを見るなりと、耶穌の言を守るの結果は斯の如し、唯其行爲の範圍に於てのみならず、其思想、感覺、意志の範圍に於ても、舊事一變して新らしく爲るなり。余を以て之を見るに、凡そ此世の難事中心にて、人の外部の生活を一變するのみならず、其人自身を一變する程難き者は、わらじ、人の心を一變するは恰も數多の新世界を造るが如し。

古來會て此世に於て教へ、生活し、或は死せし者の中よて、耶穌を除くの外、斯る事を爲せし者ありや。彼等其在世の間に之に爲せしや、世人の耳目の及ぶ所より去り往きて、後殆んど二千年にして尙ほ且つ此事を爲す者ありや。然るに耶穌は此奇蹟を現今よ於て爲すなり。而かも開明野蠻、博學無學に拘らず、凡ての人種、凡ての境遇に屬する人の心中に於て之を爲すなり。

耶穌の由來を説明するお於て、即ち耶穌の品性を闡明し、其萬有中に於て屬すべき部類を定むるに於て、誠實なる思想家は宜しく人の生活上に生ずる結果を考ふる而已ならず、人の品性上に生ずる結果をも併せて考ふべきなり、蓋し生活上の結果は品性上の結果に由れば也。我等之を物理學者に聞く、曰く、凡そ結論を爲すには、宜しく先づ諸の事實を考ふべしと、蓋し是れ至言といふべし。ペイコンよりも久しく以前に此原則を教へしは耶穌なり、其言に曰く、其果<sup>み</sup>由て之を知べしと。耶穌の何者たるやを講究するには、我等宜しく人類の生活中の事實にし



て耶穌に關すと見ゆる者を考ふべきなり。我等は既に人の品性の變化、——此變化を何と名くるも妨げなし——即ち耶穌に従順するの結果たる品性の變化をいへり。此關係に於て、他の一の最も驚くべき事の講究を要する者あり。余が今陳べんと欲することは、普通の情理と世俗の推論を以てすれば、是れ人が目に見ず、手にも觸れざる者に對して呈する凡ての所作中にて、最も奇異にして説明すべからざる所の事たり、即ち耶穌の眞弟子たる者が耶穌に對して、之を教師としてに非ず、之を一個人として、懐く所の比類なき愛心是あり。此事實は何人も之を否認する能はず。若し耶穌果して唯人に過ぎざる者ならん乎、何人能く此事實を説明し得ん。苟くも歴史を知り、若くは今日の世界を知る者は、夫幾百千万の人の——男女老幼が——耶穌に對して心の全幅を傾注する深愛、即ち凡ての

恐懼を排除し、また他の凡ての愛に凌駕する深愛を感じ且つ之れを言行に顯はしたることを疑はざるべし。或る大教師及び領袖等は其の在世中に、彼等の爲めは生命をも顧みず、爲めに死せんとすまでに彼等を愛せし門弟若くは朋友を有したり。或日第一世ナポレオン戰場に在りける時、敵の射し破裂彈ナポレオンの近くに落ち、將に破裂せんとせし瞬間に於て、一人の兵卒は其愛する大將に害無からしめんとて、飛び來りてナポレオンをかばひ、彼れを抱きし儘、彼の身代りとなりて死せり。我等は此兵卒の心情を會得す。然れどもナポレオン囚はれてヘレナ島に流人と爲り居たる時、一日往事を回顧し、彼れが權勢を有せし日に於て寵愛せし者共すら、彼れが流人と爲りたる後、彼れの爲めに白刃を提げんとする者一人も無きことを歎せり。然らば現今に於てナポレオンの爲めに死せんとする者また誰れかあるや。



按に世間には古來衆くの人に頌讚せられ、衆くの辯護者羨慕者等を有する思想家、詩人、雄辯家、哲學者少からず。シエキスピールも羨慕者の多きこと、世の最上流に在る者に譲らざるあり。然れども夫の名も知れざる幾千百萬の人が全幅の精神を傾けて、夫の唯一の人、即ちナザレの耶穌を愛するの如き深愛を以て、シエキスピール其人を愛する者果して誰れかあるや。諸君は余が斯る問ひを發するを見て驚くならん。然れども若し耶穌を以て唯人間に過ぎざる者と爲せば、此問ひは怪むる足らざるあり。道の爲に死し、または敵敵の眼前に於て己れの信仰を公言するを躊躇しざりし衆多の義人の顯はせしむるとき深愛を、此ガリラヤの一村夫に對するの外、他の如何ある人物に對しても世人の之を懐かざるは抑も何の故ぞや。

現今は勿論、古來未だ曾て佛陀に對してもマホメットに對しても、斯る

深愛を懐きし人あらざるなり。佛教及び回々教の始祖等に對して斯る愛を公表したる者の、未だ曾て之れあらざるなり。世を去りて後多くの年所を経たる何等の人に對しても、世人が斯る愛を懐けること未だ曾てあらざるなり。

此愛の自己の觀念の爲めに猥ふ人と戦ふが如き狂信に非ず、一個人が一個人に對するの愛なり。耶穌に對する此愛心は從來人心を支配せる所の主たる愛なること歴史上に顯然たり。此愛の爲め凡ての愛を棄て、凡ての愛を十字架に附けたり。

耶穌を除きて、他の孰れの人の爲めにか、正氣の男女が斯く其力を竭し、生涯を獻げて奉事するや、他の孰れの人の爲めか欣然として死に就くや。久しき以前に人間の中より去り、五官の感ずる所理性の考ふる所によれば、世を去て復還ざる人あるに、之が爲めに死する者果して他よあ



りや。然るに數百千年の經過も、海洋の遠隔も、現世と未來との程知れざる遠隔も、人種の異別も、共に此耶穌に對する愛を冷ならしむるに足らざる也。道の爲めに死せる人々、エルサレムに於て爲せしとは、其後幾何もあらずしてローマに於ても、アレキサンデリアに於ても、また之と 同じき世界の部にありし當時の各國各都に於ても、同じく道の爲に死せる者出で、之を爲せり。其後數百年間も同様なりし、即ち此ガリラヤ人の爲めに口に讚美歌を唱へ、義人は死せり。中古歐羅巴の各國に於ても亦然りし。我等の時代にもマダガスカルに於て此事ありし。異教の偶像を拜せし熱帶地方の黒色人の子孫が、男女老幼を問はず、彼等よりは遠く海陸を隔て、殆んど二千年以前に人の救はるべき道を教へし所の、彼等が會て見しこと無き耶穌に對して、萬事を壓するの熱愛を顯はせり。マダガスカルに於ても、羅馬に於ての如く、義人は道の爲め

に死せり。是は、キリストの愛かれら<sup>は</sup>を勵<sup>は</sup>せばあり。然り、今日の世界に於ても、およそ耶穌の言の傳はれる國々の最も善き人々の然か耶穌の爲に死するを辞せざる也。而して此愛の時を経るに隨ふて益々熾んに強く爲り、古へより未だ曾て今日の如く人が耶穌を思ひ、耶穌を愛することの厚きはあざりしなり。諸君若し今我等が講ずることの不思議を幾分にてても會得せんとならば、夫のガリラヤ州ナザレ村のヨセフの店に會て大工たりし人を除くの外、ソクラテス若くは其他凡そ女より生れし者の爲めに喜こんで死かんとする熱愛が今日億萬の人の心中に勃興したりと試みに想ひ見よ。諸君は斯の如き事を想像する能はざる也。耶穌の事及び耶穌に對する愛心に至りては、人の想像を恃まず、我等は現に其歴史を有す。而して若し道の爲めに死すべき事今日に起らば、悦んで耶穌の爲めに死し、以



て其忠僕たることを表すべき人が、世よ衆多あることを我等は知るあり。耶穌が世人の眼前より去り徂きし時に於て、唯人生の情理を以て推測したらんには、耶穌てふ名は羞辱の稱呼と爲り、遂に尋常の罪人の如く、——當時耶穌の兩側に於て均しく十字架に附けられし兩個の罪人の如く——其名も横死も共に人類の記憶に留まらざるに至るべきの外、他に如何なる結果をも生ずべき望無かりしあらん。人生の情理を以て見たらんには、耶穌の其死後に於て一人の徒弟をも決して有すべからずと思はれしならん。人生通常の意志行動の理に照して考へたらんには、耶穌の死後に於て濟々たる徒弟の大衆群り出で、其數益を加はり、耶穌の征服の版圖を世界の全面に擴張し、時來り時去るも團結益々固く、種々の反抗劇烈なる迫害を悉く忍び、紀元千八百八十九年の今日に至りて、世界に於ける主たる原動力、即ち人間に未だ曾て有らざりし所

の最も活潑なる進取改革的なる、争ふべからざる原動力たるべしとい、耶穌の死せし當時に於てや、何人も氣の狂はざる限りは、決して預想し得ざりし所なり。是れ決して預想し得られざりき、世界の主宰權は悉く耶穌に敵對せり、若し耶穌にして唯人間に過ぎざる者なりしならば、一の運星も耶穌の爲めに輝かざりつらん。然れども、十字架に附けられたる耶穌は永遠までも生存す。其の十字架の周圍は世々の戦争地ありし。凡そ人類の工夫及び憎惡心もて案出し得し手段は耶穌がクラニオンにて點せし巨火を消さんとして悉く用ひられたり。然れども耶穌は生存す、今日に於ても人の心中に生存し、單獨よ其征服の道を進み行く也。耶穌の從僕等は、其主を愛するが故に、天下の各國に於て主の道を擴充す。往昔地中海に濱せる諸國に於けりしが



如く、現今も異教を奉ずる諸大國、即ち印度支那日本等に於て、また大洋中の諸嶋嶼も於て、耶穌の従僕等、耶穌が自ら再び來らん迄は諸國を傳へよと命せし物語を傳へ居るあり。然り、而して彼等は此物語を傳るに方りてや、耶穌の最初の弟子等が在世の時の如く、今も尙ほ「天下を亂す者」といはるゝあり。

普天の下國として耶穌の子等が耶穌の國を設立せんとて勉め居らざる所なし。彼等は耶穌の爲に死し、他人また之に代り、斯く繼續しつゝ、エルサレムに於て始められし事業は永遠に廢ること無し。天下の歴史は耶穌が「夫われは世の末まで常に爾曹と偕に在るなり」といひし約束の確實あるを示せり。

耶穌の如き人物は、現に其人が生存せしに非ずば、決して想像し得ざりしあり。耶穌の生活の如き生活はヒブライの地に自然に生ト得ざりし

あり。耶穌が教へし所の如き深奥ある眞理は、唯人間に過ぎざる者等が、講究せずして知り立証せずして人に教ふることを決して能はざる所なり。唯人に過ぎざる者にては耶穌が企圖せし所の如き事業を未だ曾て想ひしことあらず。若し唯人に過ぎざる者ならば、耶穌の用ひし所の如き方法手段を用ひざらん。唯人に過ぎざる者にては、人類を道義もて征服する如き大計畫を案がへしと古來未だ曾てあらざるなり。古來唯人類に過ぎざる者が、耶穌の如く、人類の良心、愛、意思等を掌握支配せしこと未だ曾て之れ有らざるなり。

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

シモン、ペテロ曾て耶穌に對して、「爾はキリスト、活神の子なり」といへり。是れ今日も亦ても基督教々會全体の信仰なり。聖約翰がいひし重大の言は聖書の教義として又道理と歴史の斷案として、俱々確乎不拔の



り、其言又曰く、道は神と偕にあり、道は即ち神あり。(中略)それ道肉體と成  
て我儕の間に寄れり。我儕その榮を見、實に父の生たまへる獨子の榮  
にして恩寵と眞理あて充りと。  
耶穌の人性と其事業及び感化力の諸事實は、我等が耶穌を以て人類中  
の一人と爲そを許さず、我等唯其神性を認めて始めて其人性の諸事實  
を説明し得るなり。耶穌を以て神性と人性を併有する者ありと認むる  
時は、萬事和諧す、奇蹟は耶穌の傳記中に相當なる地位を占む、心靈と物  
界、天と地、神と人、此等皆基督なる耶穌に於て相合ふなり。  
然りと雖も、――耶穌若し人類たるに過ぎざる者にもせよ――其人物  
たるや、我等が彼れの爲に千たび死すとも悔い無かるべき者にして、永  
遠無窮を通じて尊崇隨順すべき人にこそ。  
基督人物考終

明治二十七年十二月一日印刷  
明治二十七年十二月四日發行

原著者 米人アツチカス、ヘーグツド

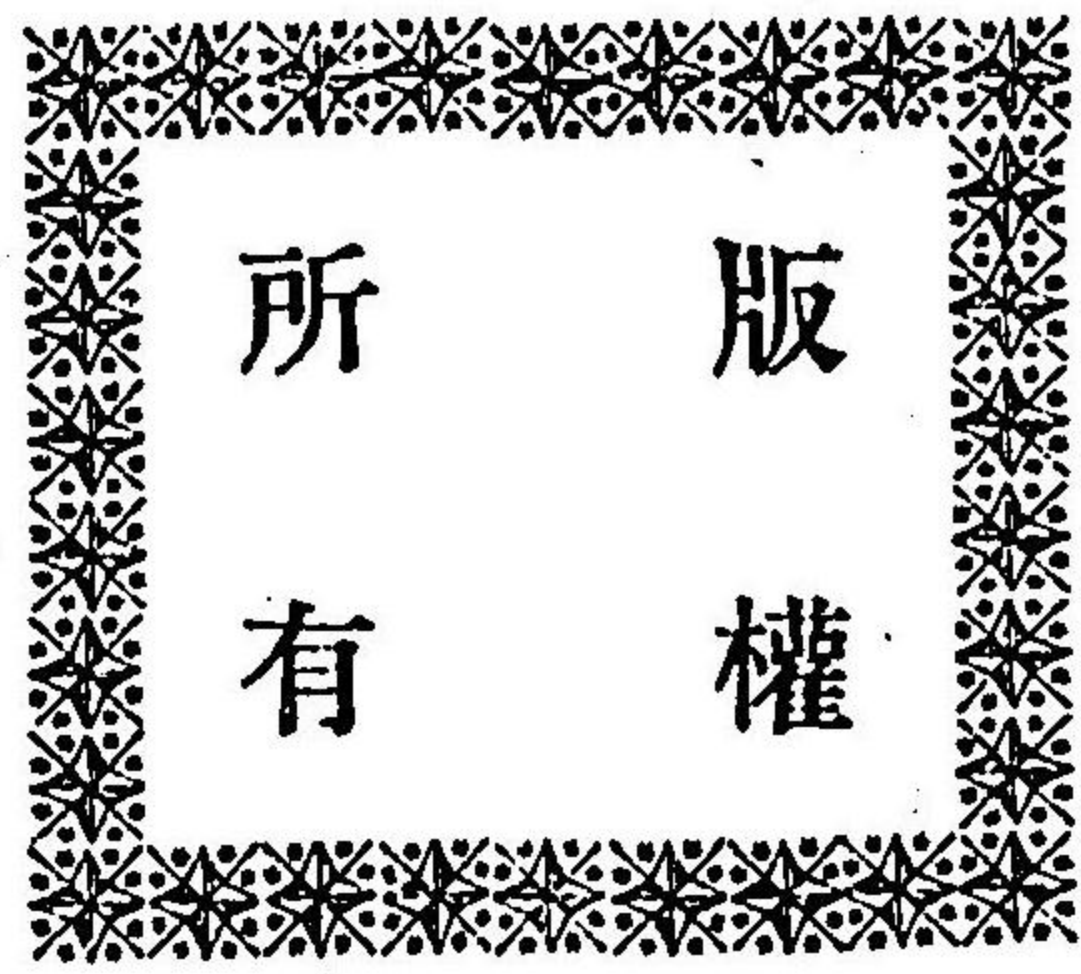
翻譯者 高橋五郎  
東京市芝區三島町十二番地

發行者 清水俊藏  
東京市麴町區紀尾井町三番地  
地寄留

印刷者 小方仙之助  
東京市麴町區有樂町三丁二番地

發行所 メソヂェスト出版舎  
東京市京橋區銀座三丁目八番地

印刷所 青山學院實業部  
東京府下南豊島郡澁谷村一  
番地



版權所有



頤  
頤  
頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤

頤  
頤  
頤  
頤  
頤  
頤



THE  
MAN OF GALILEE

BY

BISHOP ATTICUS G. HAYGOOD, D.D. LL.D.

TOKYO,

1894.

Published by

The Methodist Publishing House.

---

FOR THE

*Methodist Episcopal Church*

AND THE

*Methodist Episcopal Church, South*

IN JAPAN.



3117  
3117119 40 KAM

COPYRIGHT BY  
METHODIST PUBLISHING HOUSE  
TOKYO.

INTRODUCTION  
TO THE JAPANESE EDITION.

Bishop Atticus G. Haygood, author of *The Man of Galilee*, has written several other books that have had a wide circulation. The best known are *Our Brother in Black*, *Our Children*, *Pleas for Progress*, *Sermons and Speeches*, and *Jack-knife and Brambles*. They all deal in a vigorous and helpful manner with vital questions of the day, and are written in a style that is lofty and eloquent, yet so plain that the unlearned may readily understand them.

*The Man of Galilee* is in a similar style and every sentence is made to contain and impress a truth. There is no wilderness of foreign terms in which the reader is lost for want of definitions. The author has no patience with a useless war of words, and in his lectures, sermons, and books, he uses such simple language that the common people hear him gladly. Yet the learned admire his power and force of logic.

It is very fortunate that such a forcible and reliable book on Christian evidences has been translated into the Japanese language, and every Christian worker should endeavor to give it a wide circulation. Today when so much that is rational barren, and lifeless



is being introduced into Japan in the name of a living, saving Christianity, *The Man of Galilee* should be welcomed by every one that hopes to see a healthy Christian church in the Sunrise Kingdom.

The author takes Jesus of Nazareth as a man, a Jew, and shows by most convincing proof that this very Man of Galilee is indeed the Lamb of God which taketh away the sin of the world. Such evidences as are herein set forth will no doubt prove to be a great light to the present attitude of the Japanese mind towards the Divinity of Christ. May they all confess him to be the Christ, the Son of the living God.

W. P. Turner.

Kobe, Nov. 20, 1894.



72
160

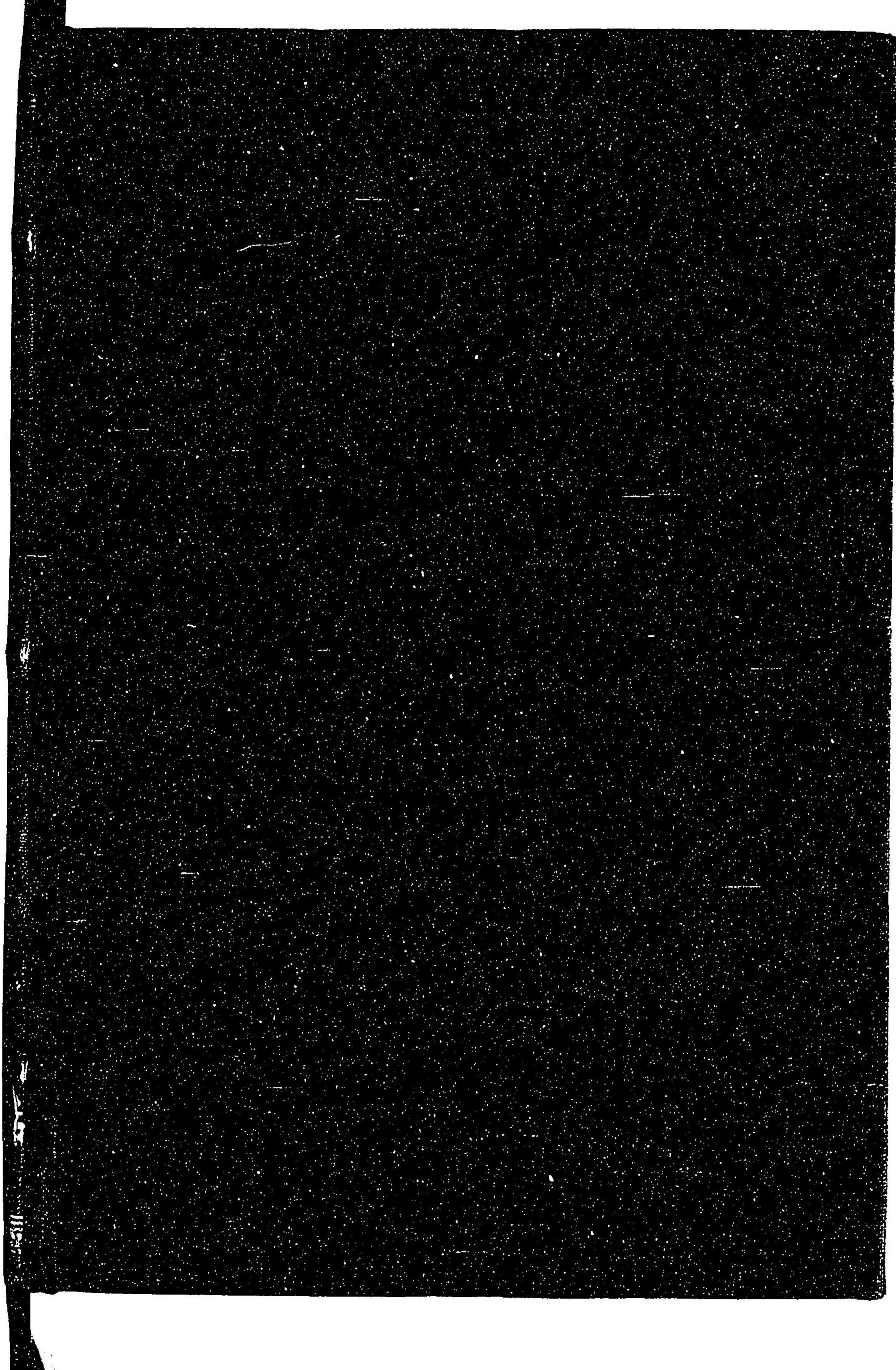


17



72  
160







020545-000-0

72-160

基督人物考

アッチカス・ヘーグッド/著

M27

ABI-0358





